

関連学会印象記

第15回国際心臓研究学会世界大会 (ISHR)

安孫子 保

第15回国際心臓研究学会世界大会 (ISHR) は平成7年7月2日から7月7日まで、チェコ共和国の首都プラハ市で行われた。私がプラハ空港に着いたのは開会前日の夜の10時過ぎであった。バスで市街地に入ると、黄色に輝く街灯がひっそりとした中世を思わせる町並みを照らし出しており、お伽の国に入ってきたような錯覚を抱いた。

会場の Palace of Culture は市のほぼ中心部にあり、近代的な立派な設備を備えた建物であった。ここに世界の40カ国から約900名の心臓学者が集まった。日本からの参加者は94名で、これはアメリカ (125名)、イギリス (102名) に次ぐ参加者の数で、ドイツ (90名) やイタリア (85名) からの参加者よりも多い数であった。会議の運営はよく organize されており、すばらしかった。これは事務局長をつとめたオスタダール教授 (チェコ科学アカデミー生理学研究所) の指揮によるものである。

本会議は3年毎に開かれている心臓の基礎的研究に関する世界大会である。3年前の第14回世界大会は神戸で開催された。本会議は心筋の代謝の研究から出発した国際的な研究会であるが、現在では心臓研究のあらゆる分野での研究発表の場となっている。世界の主要な心臓研究者がこの会に出席し、発表および討論をしている。

今回の会議で取り上げられたテーマは幅広く、トピックスとしては、「心不全の分子生物学」「収縮タンパク質」「病的状態でのカリウムイオンチャンネル」「血管内皮のイオンチャンネル」「心臓のカテコールアミン研究21年間の進歩」「虚血心筋の preconditioning」「心筋保護の内分泌的機構」「虚血心筋と不全心筋でのシグナルトランスダクション」「不整脈発生の細胞レベルでの機構」「心筋代謝の調節機構」「不全心に対する薬物作用」「急性冠血管障害」「細胞膜電流と心筋収縮」「オーバロードに対する心臓の適応」「胎児心臓の構造と機能」などがあり、循環系全般の基礎研究がこ

の学会の発表の主体をなしている。それぞれの分野で質の高い発表があった。

本学会の機関誌は Journal of Molecular and Cellular Cardiology で、この機関誌には通常の論文の他に本学会での発表論文も収録されている。ちなみに、今年の本学会の発表演題数は726題であった。その他シンポジウムが26題あり、大変盛況であった。この領域におけるわが国の研究レベルは高く、学問的には諸外国の研究に劣るものではない。

本学会において、free radical を測定するための特殊な新しい色素が英国から発表された。この色素は pholasin といい、海洋生物から分離されたもので、raical に対して高い感度をもっている。この pholasin を使うことによって、虚血-再灌流障害と free radical 発生との関係をより正確に知ることが可能となった。このような方法論の発展は他の分野の研究者との協力があって初めて可能となる。

また心臓移植に際して心臓にどのような病理性な変化がおこるかがオランダから発表された。この研究はヒトの心臓での研究である。21世紀にはわが国でも心臓移植が行われるであろうが、今からその基礎的な研究しておく必要がある。心臓を遠隔地に運ぶ場合、どのような処置をすれば一番障害を受けずにすむかという研究は、21世紀の医療を考える時に重点課題として考えなければならない。最近では遺伝子関係の研究ばかりに目が向けられているが、このような地味な研究にも目を向けておかないと、日本の心臓研究は世界の研究に遅れる事になるであろう。

今回の学会では、シンポジウムの他に726題の一般講演 (つまりポスター発表) があった。シンポジウムでは新しいデータの発表というよりも教育講演的な意義が高かったように思う。しかし、一般講演では新しい発表が多く、このような専門的な分野での発表は一般講演にこそ価値があることを改めて知った思いがした。